

いと思います。

回想（家族の軌跡）

北海道 藤原史子

渡満まで

父佐々木明は、明治三十年に北海道瀬棚村に生まれ、貧しい農家で育ったが、向学心やみ難く、苦学のすえ、教員の資格を得たのち、旭川の小学校勤務を経て、大正十二年から旭川中学（現旭川東高）に奉職し、数多くの優れた生徒さんたちに恵まれ、歴史の教員として充実した毎日を送っていた。その間に、旭川の佇立高女を出て、小学校の教員をしていた母ヤノと結婚し、大正十三年には、第一子である長女淑子が生まれ、その後二年おきに宏、孝、保の三人の男の子が生まれた。母は長女出産後に退職して、専業主婦となった。当時、まだ男尊女卑の世の中のこと、男の子三人の誕生は、父をして勇氣百倍、ますます張り切った日々であった

ことは想像に難くない。

父はまたふとした縁から、旭川の慶誠寺というお寺の住職で、ホトトギスの俳人であられた石田雨圃子先生と出会い、ご子息が父の教え子ということもあり、俳句のご指導を受けたばかりでなく、大変目をかけていただいたという。父にとっては、仕事でも趣味のうえでも、また家庭生活でも、貧しいながら一応順調なすべり出しであったと考えられる。

ところが昭和八年に、父は肺結核に冒された。病は重いものではなかったが、やむなく旭川中学を退職し、旭川赤十字病院で療養かたがた、付属看護学院で看護婦さんの養成にあたった。これも一家の生活を考えなくてはならなかった多くの方のご配慮があったものと思われる。昭和九年に、二女である私が、三年後には三女の直子が生まれた。一家が八人だったのは、たった一年の間だった。昭和十三年には、私を大変かわいがってくれた長女が、粟粒結核で亡くなった。女学校三年、数えの十六歳だった。しかし、父は悲しんでばかりはいられなかった。「自分が苦学をしたので、三人の男の

子には、どんな苦勞をしても自分のできなかつた大学教育を受けさせねばならない。そのためには、一時挫折した日本で復職しても、その収入では無理だ。思い切って満州に渡り、身を粉にして働いてみようと思つた。」と、父は後日、自分史に書き残している。

その後、父は旭川市立高女や旭川市役所などに勤務しながら、すでに渡満している知人と連絡をとりつつ渡満の準備をすすめ、昭和十六年に一人奉天（現在の瀋陽）に渡つたのである。私たち家族は翌年迎えに戻つた父と共に渡満した。私が小学三年、八歳のときであつた。

奉天から新京へ

昭和十七年、われわれ一家の満州生活は奉天で始まつた。日本は大東亜戦争に突入していた。父は既に四十歳を越していたので、仕事もなかなか思うようにはいかなかつたようである。幾つかの会社を転々としたようである。

満州では教員をする気持ちは全くなかつたようである。教員生活しか知らない父にとっては、未経験のことば

かりで大変な苦勞があつたものと思われる。そのような折々に助け船を出してくださったのは、いつも故郷旭川の方々であつたり、俳句の仲間の方々であつたさうである。両親は私たちにできるだけ不自由をさせまいと、その苦勞は並大抵のものではなかつたはずである。当時の私は小さかつたので、そんな親の苦勞など知らずに新しい友達と小学校で、あるいは家に帰つてからも元気に遊んでいた。

昭和十八年には三男保が奉天第一中学校（奉天一中）に、また三女直子が小学校にそれぞれ入学した。昭和十九年に長男宏は奉天一中を卒業して、奉天工業大学に進学し寮に入った。しかし二男孝は、奉天一中に在席してはいたが、そのころから肺結核を患い、時々病院に入院したりして、一家の心配の種であつた。

そのころ父に新しい仕事の話が持ち上がった。旧林兼漁業株式会社（後の大洋漁業）が、軍の命令で国策による全滿統合の満州水産会社に改組されることになり、その設立を担当するようになるとのことであつた。

新京（現在の長春）での仕事となり、昭和二十年四月

父は新京へと赴任した。その際二男孝、三男保は中学生なので、新学期にあわせて転校することになり、父と行動を共にした。母と私たち女の子二人は、一家の住む家が見つかったから引越すことになり、奉天にとどまった。孝と保は新京第一中学校（新京一中）の四年と三年に転入した。

戦争は日増しに激しさを増し、私たちは時々鳴りひびく空襲警報のサイレンにおびえていた。このように戦局が悪化している中、新京一中三年生にも学徒動員令が下り、食糧増産の名目で、満州東部のソ満国境に位置する、東寧報国農場に行くことになった。もちろん転校して間もない三男保もそのなかの一員であった。まだ友達も少ないうえ母親とも離れて暮らしているとあって、級友とは違い、母親の手で準備してもらったとまでできなかったが、二男孝が母に代わって下着や裁縫道具にいたるまでこまごまと、弟のために準備しやうった。

昭和二十年五月末、保は父と兄に見送られて、東寧へと旅立っていった。この東寧への動員のことは、本

誌『平和の礎』第七巻に安部二郎氏が詳細に書いておられる。私は安部氏と面識はないが、安部氏と兄は新京一中の同期生であつたらしい。

昭和二十年六月になって新京市順天区にあつた白山住宅に入居できることになり、奉天に残っていた私たちも新京に転居した。この住宅は当時としては大変立派で、暖房も集中暖房であつた。私と妹は白山小学校に通うことになった。日本の置かれている立場が、どのように悪かつたのかなどということは、後になってから知ったことで、当時の私には詳しいことは何もわからなかつた。家族にとっては満州にきて初めて経済的にもまた住む家も安定したのである。

終戦の前後

私たち家族の生活は長男宏が奉天に、三男保が東寧にと離れてはいたが、時々空襲があつても周囲にはほとんど被害もなく、戦時中としては毎日が平穩に過ぎていた。あの日までは……。そう、あの日が満州に起きた悲劇の始まりだつた。

昭和二十年八月九日、ソ連軍がソ満国境を越えて満

州に侵攻してきた。両親をはじめ私たち家族は、真っ先にソ満国境にいる三男保の安否に思いを馳せたが、情報もなく連絡をとるすべもない戦争中のこととて、心配しつついかんともなし得なかつた。長男宏は夏休みで新京の家に帰省していた。

刻々と南下して迫ってくるソ連軍から逃れようと、周囲の人々は取る物もとりあえず朝鮮の方へと逃避行をはじめ、櫛の歯が抜けるようになっていなくなった。しかし、わが家では、三男保がもし帰ってきてても家族がそこにいなければ、この広い満州でまだ十五歳の中学生が路頭に迷うことになるので、そんなこと絶対できないことであつた。

もう幾日かしたら新京にもソ連軍が到達するのは間違いない事実である。そのときには、敵に蹂躪されるぐらいなら日本人らしく潔く死のうと、家族銘々が青酸カリを持った。もちろん親の意思ではあつたが、十一歳小学六年生だつた私も、そのときやがてくる死をはっきりと意識したが、恐ろしいとは思わなかつた。長男宏と二男孝は、このまま死ぬぐらいなら敵を一人

でも倒してから死にたいと、父にその時がきたら日本軍に頼んで爆弾をもらい受けてもらう許可を得て、二人はそれを持って塹壕に伏せ、自爆してでも敵の戦車を一台でも爆破しようと思つて覚悟をしていた。

あと二日か三日もしたら、敵軍がくるのではと覚悟をしていた八月十五日に終戦となつたのである。われわれは一命をとりとめた。しかし、その晩からまた別の心配が起きていた。今まで一緒にこの街で暮らしてきた中国人は勝利者であり、日本人は敗者であつた。

中国人に心無い行為をしてきた日本人もいたので、中国人の襲撃があるかもしれないとのことで、その晩から日本人は近所の小学校へ避難をした。もう守てくれる軍隊も警察もない。自分の身は自分で守らねばならない。若い男性たちが寝ずの番をしてくれたが、恐ろしくてよく寝られなかつたことを覚えている。幸い何事もなく二日ぐらいで我が家へ戻ることができた。

一体これからどうなるのかと不安な日を送っている所へ、ソ連軍が勝利者として進駐してきた。それからソ連軍の兵隊による略奪におびえる毎日であつた。

若い女性は頭を丸坊主にし、顔に炭を塗って、ソ連兵が押し入ってくると、風呂桶に隠れたりした。私はまだ子供だったので、そんな心配はしなかったが、同級生のなかには、やはり頭を丸坊主にした人もいた。

我が家にも、二度ほど兵隊が押し入ってきて、土足で畳の上を歩き、万年筆や時計を奪っていった。大切なお金は、畳の下や襖の紙の間に入れたり、本の頁をくりぬいて隠したりして、皆、知恵を絞って守った。夜中に玄関の扉をどんとどんと激しく叩かれたこともあったが、戸締りをきちんとしていたので未遂に終わったものの、布団の中で生きた心地がしなかったことも覚えていいる。

そのような毎日であったが、家族の心は常に三男保のことदैいっばいであった。消息は相変わらずわからなかったが、九月に入って、二人また三人と東寧に行っていた新京一中生がぼつぼつ帰ってきた。その人たちの話によると、八月九日ソ連軍の侵攻と共に、東寧の新京一中三年生は全員で家族の待つ新京（終戦後は長春）へ向かい、逃避行を始めたが、既に汽車もなく歩

くほかなかった。うしろからソ連軍の戦車に追われ銃撃を受けての逃避行は、十五歳の少年たちには誠に過酷なものであった。夜ももちろん草むらに寝るのだが、追われている身では、それもごく短時間で夜を日について、落伍しないように、夜はズボンのベルトを繋いで歩いたという。次第に体力の差ができてきて、遅れる者も出始めたため、たった一人で引率していた教師の判断で、元気な生徒に先発させ、できるだけ早く一行の状況を、学校や親元に知らせようとしたものであることがわかった。

その後、十月二十日には一行の大部分の生徒が新京駅に到達した。しかし三男保はそのなかにはいなかったのである。絶望しそうな気持ちを奮い立たせて、父は一度ハルビンまで、父兄有志と子供たちを探す旅に出たが、そこに見たのは、北から避難してきた夥しい人たちの無残な姿であったという。そこでも子供たちを見つけないまま帰ってきた。私も毎日常家の窓から外をみて、兄が通りはしないかと、祈るような気持ちで見詰める毎日であった。

忘れもしない十一月三日、待ち焦がれた兄がわが家に帰ってきたのである。汚れた服を身にまとい、栄養失調のため、やせ衰えて頭は髪の毛も抜け落ち、かろうじて細い毛がわずかにぼやぼやと生えているのみであった。肩から下げていた汚れた雑囊の中には、わらの混じった黒パンが一切れと、岩塩が一かけら、それに缶詰の空缶に針金のとってをつけた物だけだった。母は抱きついて涙にくれた。私たちは、そのそばでじっとその光景を見つめていた。兄の照れたような顔を見て、よかったよかったという思いでうなずきながら。

三男保は二人の元日本兵に連れられて帰ってきたのだ。八月九日の逃避行から、小柄な保は皆に遅れまいと一生懸命に歩き続けたが、そのうちにお腹をこわして体が衰弱し、そのころは既に戦争も終わっていたので、進駐したソ連軍の病院に運ばれ、皆と別れることになったという。ソ連軍の病院は、病院とは名ばかりの隙間風の吹き込む寒い所で、食事もわずかなお粥のみという状態で、寒さと衰弱で毎日多くの人たちが死んでいき、その死体は中庭に積まれていったという。

そこで同じく入院していた元日本兵と知り合い、ここには死を待つばかりだ、今なら何とか動くことができる、と、脱出して助け合いながら帰ってきたという。この二人の元日本兵の方たちは、一週間我が家で静養し日本へ帰るべく南下して行った。これで我が家も、ようやく家族七人がそろったのであった。

兄たちの死

私たち小学生や中学生は、終戦以来学校が消滅したため勉強から遠ざかっていたが、近所の小、中、大学の教員をしていた方たちを指導者として、二学年ずつ近所の広い建物を急ごしらえの塾にして、勉強を始めていた。

昭和二十年の暮れにはソ連軍が潮を引くようになってしまった。それと入れ代わるように、日本との戦争で一時中断していた中国の内戦が激化し、新京も国民政府軍が支配したかと思うと、八路軍（共産軍）が制圧したりと、昭和二十一年に入ってから激しさを増してきた。市街戦もあり、そんなときは流れ弾に当たらないように、押し入れに潜んでいた。ひとしきり戦いが

終わると、家の窓には鉄砲の弾が当たった丸い穴が幾つもあり、家の前の道路にはどちら側の兵士か分らないが、死体が転がっていた。私の同級生の一人も大腿部に弾が当たった。しかし、戦いは時に遠のくこともあった。

新京の冬は寒い。もちろん、集中暖房も終戦と共に止まり、父は食糧の確保と共に燃料の調達に苦勞をしていた。お金も底をついたので、家にある少しでも金目の物を、街に行つて売っていた。

三男保は少しずつ体も回復し、街に物を売りに行くまでになっていた。時には売ったお金で、同じく本を売っている日本人から、私のためにユーモア小説を買ってきてくれたこともあった。二男孝は体調が思わしくなく、病の床につくようになっていた。長男宏は、奉天の大学にいるころから、飛行場作りなどの勤勞奉仕に駆り出されて、そのころから体調を崩していたが、昭和二十一年になり、とうとう孝と枕を並べて病の床につくことが多くなっていた。

そして昭和二十一年五月二十二日夜、二男孝が家族

に見守られ、静かに息を引き取った。十八歳の短い一生であった。弟妹に本当に優しい兄であった。寝るときに「きゅうりにお味噌をつけて食べたいなあ。ぼたもちが食べたいなあ」とつぶやいていた。今と違って五月にきゅうりは無く、またぼたもちも手に入る状態ではなかった。母はどんなにつらかったことだろう。

その悲しみも癒えない二カ月後の七月二十一日のころ、長男宏の容態が悪化してきた。腎臓結核で結核性腹膜炎をおこし、お腹に腹水が溜まるので、注射器で母が腹水を抜いてやっていたのだが、当然のことながら抜いても抜いてもすぐに溜まり、楽になるのはほんのわずかの時間だけで、もう末期症状を呈し、呼吸困難がひどくなってきたのである。

その日夕方になって、枕元にいて見守っていた父に兄は、「自分はもう駄目だから、生きているうちに仏様にお経をあげて欲しい」と苦しい息をしながら頼んだ。父は旭川にいるときに、慶誠寺に出入りして、お経を素人なりに読むことができたので、当時も、毎朝仏様にお参りし、お経をあげていた。兄の願いに父は

悲しみをこらえて、仏壇にお灯明をともしお経をあけて、家族皆で仏様に手を合わせた。

兄はすでに起き上がることもできないので、寢床に横たわったまま、手を合わせていた。お経が終わると私たち一人一人の手を握り、別れの言葉を言った。三男保には、「お前はこれから長男と同じになるのだから、両親を助け妹たちの面倒をみるように」と。そして私と妹にはそれぞれ「親の言うことをきいて、一生懸命勉強をするんだよ」と。苦しい息の下で、喘ぎながらこれらを言うと、間もなく静かに息を引きとつたのである。私はこの時の臨終の場面を今でもはっきりと思い出す。二十歳の立派な最期だった。

私は今に至るまで幾度か人の死に立ち会ったが、このような最期を見たことがないし、また今後も見ることがないのであるかと思うほど見事な死であった。生前から長男としての役割を自覚し、優しい中にも毅然とした態度の尊敬する兄であった。二人共、診てもらうべき医者もなく、死してなお申う僧侶もいなかったのである。

この後すぐに、私たちの住んでいるところ一帯の引揚げが始まったが、三男保の体調がまだ引揚げの長旅には無理だろうと延期することになり、八月になってまだ日本人の住んでいる同じ新京の東光路にある、日本人の引揚げた後の空き家に移った。引揚げのときはリュックサック一つしか持たないので、その家には本などが残っていた。保兄は『宮本武蔵』など厚い本を一日で読んでしまい、その早さに私など驚いてしまった。

引越して一カ月ほど経ったころだったろうか、今度は、三男保の具合が悪くなったのである。結核菌が頭にあがり、結核性脳膜炎を起こしたのである。頭痛が続き、そのときは、まだ一人近くにおられた医師に診ていただき、腰に針を刺し（腰椎穿刺）、脊髄液を抜いていただくと、脳圧が下がり楽になるのである。楽になると保兄は、東寧からの逃避行の出来事を私に一生懸命に話し始めるのだった。しかし、楽でいられる時間は短いのだということが、いつものことだから私にも分かっていたので、私は兄に「また悪くなると

困るから、静かに寝ていた方がいいんじゃない？ 治ったらゆっくり聞くから」と言って押し止めていたのである。

後で考えると、あのときもっとよく聞いてやればよかった、なんと馬鹿なことをしたのだろうと思ったのだが、そのとき十二歳の私は、必ず治るものと本気で考えていたのである。このような繰り返しでだんだん病は悪化していったのである。

ある日、私は母に呼ばれて「これからお父さんが、痛み止めの薬を買いに行くのだけど、お父さんは頭がぼーっとしているから、危ないので一緒に行って行って欲しい」と言われた。今考えると、それはモルヒネだったのではないかと思う。両親は、もう保兄が助からないことを医師から聞いていて、頭が混乱していたに違いない。出掛けたのは覚えているが、それが手に入ったかどうか私には記憶がない。

そのうち頼みの医師もいなくなった。激しい痛みを訴える声にもおろおろするばかり、なすすべもなかった。

ある日、私は兄のあまりに苦しむ声にいたたまれず、外に出てしゃがみ込んでいた。どのくらいいたったところか、大きな呼び声に急いで家に入った私の目に、死んだように目を上転させた兄の姿があった。もう苦しみを訴えることもなく、安らかな顔で、何を言っても分からず、綿に浸した水を唇につけてやるほか、食べることもできなくなった兄であった。

そんな何も分からなくなった兄の口から「ふみちゃん、ふみちゃん！」と私を呼ぶ声があったのだ。今もその声は、私の耳の底に残っている。口にした言葉はそれだけだった。時には喧嘩もし、そしてとても仲の良かった兄だった。嬉しかった。最後に私の名を呼んでくれたことが……。

そんな状態で一週間、お腹と背中中の皮がつくほど痩せて、見守っていた両親と私たち妹二人にみとられて息を引き取った。昭和二十一年十月八日、十六歳の短い短い生涯であった。あのように過酷な目に遭っても、「なぜ自分がこんな運命に遭わねばならなかったのか」などと、文句も言わず愚痴も言わず、優しく、しかも

負けず嫌いで、私たち兄妹の中で一番頭の良い兄であった。家族はたった四人になってしまった。

引揚げとその後

三人の男の子の教育のために渡満して、国が破れるという不可抗力に遭遇したとはいえ、その目的の全てを失うという、二カ月おきの三人の男の子の死亡は、親の、殊に母親の気を狂わすほどの出来事であったはずだ。しかし、最後の兄保が亡くなってから十日後には最後の引揚げが始まり、残った私たち女の子二人を連れて帰国しなければならないという状況が、両親を救った。平時なら、母の精神状態はおかしくなっても当たり前だったはずだ。

十月下旬、一人一個のリュックサックを背に、小さな三個のお骨箱を首にかけて、長春駅から、無蓋の貨車で帰国の途にいたのである。兄たちが守ってくれたのか、途中心配した雨にも遭わず、壺蘆島で一週間か十日、地面にゴザを敷いた上に寝て過ごした。その後、貨物船の船底に寝て、佐世保に着いたのである。

船から日本が見えたとき、待ちかねたように皆甲板

の上に出て、懐かしい故国を眺めたのであるが、だんだん近づいてくる佐世保の港の、目に染みるような緑は今も忘れられない。

またしばらく佐世保に留められ、その後、混んだ汽車で北海道への長い旅となった。この汽車の中で、私たちの前に座った初老の御夫婦が、私と妹に海苔でくるんだ梅干し入りのおにぎりを一つずつ下さったのである。本当に随分久しぶりの白米のおにぎりであった。この世にこんな美味しいものがあつたのかと思うほどのおいしさであった。ずっとお米など食べることもできず、糊気のない高粱という満州でとれる穀物を食べていた上に、それもお腹いっぱい食べることでできなかったのだから。

昭和二十一年十一月六日、我が故郷北海道旭川市での戦後の新たな生活が始まったのである。世話になる親戚もなく、慶誠寺の一室にお世話になり、私と妹はそれぞれ女学校と小学校に転入した。

それからの父は、生きるために本当に必死に、色々な仕事をして働いた。しかし戦後の、価値観の全く変

わった世の中では、無一物から生計を立て直していくのは、並大抵のことではなかった。食べる物も乏しく、また着る物も貧しい生活が続いたが、自分の国にいて、身の危険がない生活は何物にも替え難い、幸せなものであり、生活は大変ではあったが、我慢ができないことはなかった。長い間お世話になったお寺を出て、本当に小さいながら、一軒家に入ることもできた。

その後、学区制が変更になり、六・三・三制が施行され、続いて男女共学となった。そのために、教員が不足となり、父にも再び高校の社会科の教員になって欲しいとの話があり、しばらく教師から遠ざかっていた父には、ためらいもあったようだが、何より安定した収入を得ることができるので、喜んでお引き受けをしたという。私は高校二年の時、男女共学となり、何とか受験をして、手に職をつけたいと思っていた。にわかには総領となってしまう、また親もすでに五十歳を迎えようとしていたので、生活力を身につけねばならないのは、当然のことだったのである。

幸い北大に合格し、後、札幌医大へ進んで、医師の

道を選んだ。妹も三年後に北大へ進学し、同じ医師の道を進むことになったのである。両親は大変喜んでくれたので、私たちも少しは親の胸の痛みを、和らげることができたかもしれないとホッとした。それからの父は私たちの学費を得るために、定時制高校の教員をしながら、不足している社会科の教員として、乞われるままに全日制高校の時間講師もするなど、身を粉にして働いてくれた。六年後私が卒業し、一年間のインターンを終えたとき、父も定年となり、私たちと生活を共にするため、両親は札幌に移り住んだ。

昭和三十五年に私が結婚し、同じ医師である夫の理解のもとに、私の両親と同居した。妹も昭和四十年に、医師と結婚し家を出た。その後は、それぞれに二人ずつの男の子ができ、男の子を失った両親は、とても喜んでくれた。

父はその後十年ほど、札幌の私立高校に講師として勤めた後、仕事を辞めて趣味の俳句に没頭するようになった。母は仕事を持つ私を助けて、孫の面倒をみた上、食事の支度もすべてしてくれた。母は日本へ帰っ

てからは、満州の話や兄たちの話をすることは全くなかった。思い出すにはあまりにもつらい出来事だったのだと、私たちもそのことを母の前では口にしないようにしていた。ひたすら私たちや孫たちのために、その成長を喜び、死の二十日前まで食事の支度をしていた気丈な母であった。二十日ほど床についた後、昭和六十年八月夏の暑い日に、静かに息を引きとった。八十四歳の生涯であった。

父はその後も元気で俳句に精進していたが、白寿となつて自分で記念句集を出し、家族や俳句仲間に祝ってもらつてから急に弱つてきて、平成八年二月記録的な大雪の中、九十八歳で静かに命を終えた。

両親にとつて大変厳しい生涯であつたと思うが、思い返してみても、私には自分が兄たちの分も、親孝行したとは思えない。唯一親孝行をしたとすれば、それは私が夫と結婚したことではなかつたかと思うのである。夫は忙しい中を暇をみては、父の暮の相手をしてくれたり、母の病気のときや手術が必要なきなど適時適切に、すべての手配をしてくれた。苦勞をしてきた両

親に心の平安を与えてくれた。親たちも大変感謝をしていた。私も両親を姉や兄たちのもとに送り届けた今、夫に心から感謝している。

流浪の旅から入植まで

岩手県 及川 正一

激動の昭和も幾多の思い出を残して過去のものとなり、その昭和史には軍部の台頭、そして大東亜戦争という日本の存命をかけた忘れられざる時代があつた。終戦後は国民一人一人の忍耐と努力などによって国の再建に取り組み、平和をスローガンに各自が額に汗、手に豆して働いた甲斐あつて、逐一経済的復興と併行して、廃墟と化した日本の国土も日一日と復興し、ついには経済大国といわれるまでになった。

そもそも、私が満州開拓に参加しようとしたのは、高等小学校卒業の年であつた。我が村（江刺郡梁川村）からはすでに内原訓練所の第四大隊副官（後に